



市場はいつから市場になったか : 中世末期低地地方における市場経済化の進展

奥西, 孝至

(Citation)

国民経済雑誌, 227(2):1-13

(Issue Date)

2023-02-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100479006>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100479006>



国民経済雑誌

市場はいつから市場になったか
— 中世末期低地地方における市場経済化の進展 —

奥 西 孝 至

国民経済雑誌 第227巻 第2号 抜刷

2023年2月

神戸大学経済経営学会

市場はいつから市場になったか

——中世末期低地地方における市場経済化の進展——

奥 西 孝 至^a

需要と供給により価格が決定される場としての市場、また自由な競争により調整される経済としての市場経済は現代の経済とされてきた事象であり、市場ならびに市場経済がどのように形成されたかは西洋経済史の重要なテーマであり「規制から自由へ」という枠組みでの研究が行われてきたが、近年のグローバルヒストリーの研究によりそれぞれの社会の違いを反映した多様な市場経済化の状況が明らかにされている。中世ヨーロッパ有数の商工業地域であり先駆的な市場経済化がみられた低地地方においても当時の低地地方の社会構造と深く関連した多経路的な市場経済化が進展していたと考えられ、商品、金融、土地、労働市場の成立、発展のあり方は市場により大きく異なり、自由と規制の関係は相対的であるだけでなく、最適な価格決定につながる情報の共有、公平性においても大きな差異があると推測され、その解明には社会史、文化史等との学際的な枠組みでの研究が重要になっている。

キーワード 市場、市場経済、低地地方、情報の共有、公平性

1 はじめに 市場経済と市場

市場経済と資本主義は現代経済を示す用語として日本では両者をあまり区別することなく使われる事例も散見されるが、英語としての語義が示すように、資本主義 Capitalism は原義的には経済にとどまらず資本を持つ者が優位である状況で政治体制も含むのに対して、市場経済 Market Economy は経済活動における交換・調整のあり方に焦点をあてたものであり、一般的には、外からの制約を受けない自由のもとでの参加者間で需要と供給の関係により調整・価格決定が行われる経済を意味し、自由な競争をその大きな特徴とする国家に属さない私的領域における経済活動を示すものとされてきた¹⁾。また、近代経済学では、市場を外部からの干渉を受けないという意味での自由、また、需要と供給の間での公平性、情報の共有があることで最適な価格決定、最適な調整が行われる場と規定し、現実には外部からの干渉、多くの制約が存在していることから、「規制から自由へ」という外部からの干渉、制約が減少し市場機能により最適な形で調整が行われるようになる過程としての市場経済化が経

a 神戸大学大学院経済学研究科, okunishi@econ.kobe-u.ac.jp

済発展と深く結びつくものと考えられてきた。このような自由な競争にもとづく市場経済は自由を前提とする民主主義とともに現代世界の特徴とされるとともに、これら自由にもとづく市場経済と民主主義を発展させたことがヨーロッパの特徴であるとともにその優位性を示すものと考えられてきた。

実際の取引の場としての市場は、どのような名前をもつにせよ世界中に存在するものであり、経済学的には特定の場と時間取引が集積することによる諸取引費用の軽減という規模の経済性がその成立の要因であると考えられ、外部からの干渉を受けないという意味での自由なもとでの競争があることは条件となっておらず、近年の研究では人が集まる場所がもつ社会的文化的な機能や取引にあたっての規範、倫理がもつ外部性、市場の合理性に関わる社会的文化的要素の重要性が明らかにされてきている。²⁾

また、ヨーロッパにおいて市場経済化の進展が「規制から自由へ」と結びつけられたことには、中世ヨーロッパの市場ならびにその後の市場の発展のあり方が関係している。

ヨーロッパにおいてはいわゆる西ローマ帝国の滅亡をその変化の一部として内包する古代文明社会と非文明社会が融合する中で、面積あたりの生産性の低い農業を基盤とする分権型統治体制と分散型経済構造をもつ封建社会が次第に形成された。このような農村および農業が軸となる封建社会において領主による農産物の集積とも深く関わる形で成立した商工業者の居住地として成立した都市では、広場など特定の場所と時間で非常設な取引の場として開催された市場（market）は、住民に食料など生活に必須な日常財を供給する都市の根幹となる要素となり、次第に日常財を基本とし仲介業を必要としない域内流通と、非日常財を基本とし仲介（商業・運送）を必要とする広域流通の結節点としての役割を果たすようになった。ただし、それは領主の統治の下で行われる取引の場であり、中世英語の語義では自由は含まれないものの公開性や公共性のある場としての意味があった。³⁾

封建制のもとで領主権に服していた都市が課税権などを得て領主権からの離脱を意味する都市の自由と自治をえる流れと並行して、市場での取引に関して公平性、公開性、透明性を保証する規制・制度を発達させたことで、外部からの強制がない（自由な）取引により参加者全体の需要と供給により価格が決定される場としての「市場」とみなされるようになり、取引価格をもとにした価格表の公示が一般化した。また、市場での取引では転売等の仲介行為、仲介利益が禁じられるなど仲介利益を前提とする商業とは異なる性格を持っていた。⁴⁾

このように中世ヨーロッパ都市の市場では自治とも関連した市場規制制度の整備により外部からの干渉をうけない「自由」な取引が行われ、需要供給関係に基づく最適な形での価格決定がなされる場（経済学的な意味での市場）の原型といえるものであった。ただし、それは規制により対象が限られた特権としての「自由」に止まり、その対象とならない外部者にとっては活動を大きく制限するものであった。そのため、経済史においては中世末期からの

中世の特権の廃止、縮小による営業、参加の自由の拡大という制度的変化が注目されることとなった。また、このような制度的変化と関連した、胡椒などの東方産品、高級毛織物、塩などの費用がかかっても利益が見込める財が主要商品となる中世的商業から、地域分業とつながる価格差にもとづく穀物などの重量財も対象となる近代的商業への変化もまた市場経済化につながる重要な変化であると考えられ、近代国家による高関税などのいわゆる重商主義政策が国境を超えた市場機能による地域分業を阻害していると考えられたことが古典派経済学の「規制から自由へ」という考え方につながっている。その後の統計学、計量分析の発展を受けて、中世末期以降のヨーロッパにおける市場経済化に関して制度から構造さらに機能を対象とした研究が進められ、古典派経済学の「規制から自由へ」という考え方を基底としつつ、限定された範囲と参加者を対象とした特権としての自由がより広範囲に適用される過程としてとらえ、異なる場所の価格の同期化、平準化、安定化を市場経済化の指標とし、都市、国家の規制の影響についての分析による研究の一つの重要な流れとなっている。⁵⁾

生産要素である土地、労働市場の形成も市場経済化に関して近年注目されている現象であり、資本主義の発展と深く関わる封建制・領主制の終焉、変質により農村の土地と労働が売買の対象となり、都市ではギルド制約を超えた労働が流動化した結果、これら土地、労働に関する需要と供給により価格、賃金が調整される市場がこれまでの想定より早くまたヨーロッパに限らない地域で存在しており、自由な競争に結びつかない市場経済も存在したという見解も出されている。⁶⁾一方、商業史、金融史においては中世ヨーロッパでは相対取引の集積の場であった商業中心都市において中世末期から近代初頭の取引所の成立により公開性をもった取引が可能になったことによる商品市場、金融市場の形成に関する研究が進められている。さらに、美術史においても画家に対する賃金から作品そのものが売買の対象となることでそれまでの画家への賃金から作品そのものの価格へという変化と並行した美術市場の形成など「規制から自由へ」という枠組みでは収まらない多様な市場経済化に関わる変化がみられたことが明らかにされつつある。

近年のグローバルヒストリー、比較経済史の研究では産業革命に至るまではヨーロッパ、アジアの生活水準に大きな差がないだけでなく市場などの経済構造にも多くの類似性がある一方で、それぞれの社会の違いを反映した多様な市場経済化が存在した可能性が指摘され、自由な競争は、市場経済に付随する本質的な要素ではないとする研究もみられる。⁷⁾

このことをふまえ、中世ヨーロッパ有数の商工業地域である低地地方の市場経済化の研究では中世末期の社会的な特徴をふまえつつ、商業の市場化の一環といえる商品市場・金融市場、資本主義の形成と深く関わる土地市場・労働市場、市場統合と流通特権との関係につながる地域市場などそれぞれの市場の形成のあり方を分析していく必要があり、本論文ではまず商品市場・金融市場の形成に焦点をあてて検討し、今後の研究につなげていく。

2 中世末期の低地地方 多核多層社会の成立

ほぼ現在のベルギー、オランダに相当する低地地方は北緯50～53度の北海沿岸に位置し北海に注ぎ込むライン、マース、スヘルデ河口部に形成された複合デルタ地帯などの低地がその国土の多くを占めていることからこの名がある。なお低地地方が現在の形での一つのまとまりをもつ地域となったのは中世末期であり、1369年にブルゴーニュ公フィリップ（フランス王ジャンの王弟）とフランドル伯ルイ・ドゥ・マールの娘でフランドル伯、アルトワ伯（母より）などの継承権をもつマルグリットとの婚姻を契機として、その後もこれら婚姻などによる継承により神聖ローマ帝国に属する近隣のブラバント公領、エノー伯領、ライン川以北のホラント伯領なども含む低地地方がブルゴーニュ公家のもとに政治的に統一され、フランス王権から自立したいわゆるブルゴーニュ公国の最も重要な地域となった。その後、1477年のブルゴーニュ公シャルルの死により、低地地方の大半は娘のマリア（同年にオーストリア・ハプスブルクのマクシミリアンと結婚）が継承、1482年のマリアの死後は息子のフィリップが継承（幼年であったためマクシミリアンが1492年まで代わって統治）、さらに、1500年にフランドルのヘントで生まれ1507年にスペイン王、1514年に神聖ローマ皇帝となったカールの下で「一七州」として制度的な統一も進められたが、1560年代からの低地地方の反乱を契機として北部七州が分離独立し、また、アルトワやエノー西部がフランスに併合されたことで現在のベルギー、オランダにつながる南北低地地方の領域がほぼできあがった。このように低地地方の成立においては、婚姻による諸侯位の継承（厳密には結婚後もその位は女性がもち、その位は子供に引き継がれる）が重要な役割を果たし、フランス王国に属するフランドル伯領を核としてフランス王族のブルゴーニュ公家の支配が神聖ローマ帝国（ドイツ）領内にも広がる形で形成され、このように形成された低地地方が神聖ローマ皇帝でもあったオーストリア・ハプスブルク家の支配に入る形となった。このため法体系や最終的な宗主権の帰属が異なる地域の多元性が存在する低地地方に対する本領を低地地方の外にもつ君主による統治は、君主直属、低地地方を統括、各伯公領という階層性をもつ構造のもとで行われ、低地地方を総括する行政官庁は各所に分散して設置された⁸⁾。

なお、低地地方は中世初頭においてヨーロッパの主要地域を統一したフランク王国の発祥の地であり、メロヴィング朝フランク王国の初代のクローヴィス5世期にスヘルデ川（エスコー川）中流のトゥルネーに生まれている。その後フランク王国はカロリング朝のカール（800年にローマ教皇レオ3世により皇帝戴冠）の下で版図はほぼ最大に達し、王宮の置かれたアーヘンに近接するリエージュをふくむミューズ（マース）川流域、エスコー川上流のカンブレなど低地地方南部では帝国の中核地域として大土地所領などが発達をみせた。息子ルートビヒ王の死後に王国は3つに分割され843年のヴェルダン条約によりスヘルデ川以

東は長子ロタール、以西は末子シャルル（西フランク王国始祖）領、880年のリブモン条約によりスヘルデ川以東は東フランク王国に帰属することとなり、以後スヘルデ川は東西フランク王国の境界となり、北海とスヘルデ川に挟まれた西フランク王国の領域はフランドル伯領となった。一方、ゲルマン系、ラテン系の言語境界はほぼ東西に連なる形で低地地方を横切っており、フランドル伯領は低地ゲルマン語（低地語：オランダ語）、ドイツ帝国領に属するエノーは俗ラテン語（フランス語）という政治的境界と言語境界のずれ、貴族層と庶民層の使用言語が異なる言語併存状況が生じている。近年の研究では低地地方がこのような政治的、言語境界に位置し、法的、言語的な多元性を有する社会となったことが遠距離貿易の拠点となった要因として注目されている。⁹⁾

低地地方の形成の核となったフランデレン（フランドル伯領）ではブルッヘ、ヘント、イーペルのほかコルトレイク、オッデナールデなど、ブラバントではブリュッセル、ルーヴェンなど、アルトワではアラス、ドゥエなどの都市で毛織物などが生産され北イタリアとならぶ人口稠密かつ都市化が進んだアルプス以北のヨーロッパ最大の商工業地域へと発展し、遠距離貿易においては12世紀にはシャンパーニュの大市を経由する南北ルートが最も重要で、アラスが低地地方の商業の中心となったが、13世紀以降にはドイツ・ハンザ商人による北海・バルト海をつなぐ東西ルート、また、西地中海を経由するイタリアとの海上連結による貿易も始まり、ドイツ・ハンザの商館が置かれ、多くのイタリア人商人が定住したブルッヘはヨーロッパ有数の商業・金融の中心となった。ブルッヘではイタリア商人が利用する建物群とそれに囲まれた空間の *Byrsa Brugensis* (*Ter Beurse* などの表記もある) ではこれらの商業取引、決済が行われ、イーペル、ヘントには、買い付けにきた商人との毛織物取引を集約して行う場としての毛織物会館 (*LakenHal*) が創設されている。¹⁰⁾

低地地方の諸都市は自治にかかわる多様な特権も認められ同業者組合を基盤とした都市の行政制度の発達をみせたが、特にブルッヘ、ヘント、イーペルの3都市は自立性を強めて経済のみならず政治的な重要性も増し、ブルゴーニュ公国期には4者会議の構成員として低地地方の統治の一翼を担うなど特別の位置を獲得した。これら3都市とその他の都市との差異は人口規模でもみられ、スヘルデ川とレイエ川の結節点に位置するヘントは南低地地方内流通の中心ともなり13世紀末には6万4千人とアルプス以北ではパリに次ぐ人口、ブルッヘも4万人、イーペルの最大期にはほぼ3万人の人口をもち、コルトレイク、アールスト、オッデナールデなどその他の都市は人口1万人以下にとどまっている。このような経済的・政治的な力を持つ3大都市の並立および他の都市との差異は、君主都市間、3大都市間、また、大都市と中小都市間との利害の対立を生じさせ、時には武力を伴う紛争、反乱となるものの、これらの利害の対立を調整し、政策を決定する階層性をもったボトムアップ型の統治組織を発達させる要因でもあったと考えられている。¹¹⁾

低地地方で都市の発展および人口増加に並行する形で、都市近郊での野菜などの市場向け農産物や染料植物生産、スヘルデ、レイエ川上流のフランス語圏地域の下流地域への消費に向けた穀物生産などそれぞれの土壌や立地などの地理的差異を活かした地域内分業が進展した。同時に農村部での人口密度の高さ、一人当たりの農地面積の狭さと相関する休閑を伴わない輪作などの面積あたりの生産性の高い農法の導入とそれに伴う借地農による生産も進んでおり、土地、労働市場の成立につながる農地、農業労働の流動化も生じている。また、中世末期の寒冷化によりヨーロッパでは1318年の大飢饉以降の飢饉の頻発や1347年のペスト大流行以降に繰り返した起った疫病の流行は人口減少や社会的混乱をもたらしたが、低地地方では他のヨーロッパ地域に比べ人口減少なども相対的に少なく、都市の経済活動も維持されていることには、これらの低地地方における生産性の高い農法、借地農による効率的運営、地理的差異を活かした地域内分業に加え、必要に応じて遠隔貿易による穀物輸入を行うなど複数の供給先から複数の異なる経路により調達される多元的供給、多層的流通が存在していたことも寄与していたと考えられる。

中世末期の低地地方においては、このような物の流通とともに都市間、都市農村間の人的ネットワークを介した知識、情報の伝播が行われていたこと、これらの人的ネットワークは社会階層や地域によるまとまりがあるものの、これらの社会階層や地域を超えた人的交流や情報の伝播により、低地地方全体としての規範や価値観の共有また都市間、都市農村間の人的な移動も促されていたことが明らかにされてきている。さらにまたイタリア商人によるネットワークを介して経済的に限らない情報を伝えられてきたことが北方ルネッサンスの中心としての低地地方の画家の活動や作品の評価にも大きな影響を与えていたことも明らかになってきている。

このように低地地方は、古代ローマ帝国北方国境のラテンとゲルマンの境界領域に中世において次第に形成された法体系、言語の異なる地域を内包する多元社会であり、その形成を促進した低地地方外、低地地方内での君主・諸侯間の婚姻関係を含む多様な人、物、情報のネットワークも分散型ネットワークから担う機能に差異がある複数の中心をもつ階層型ネットワークへという変化を生じ、各地の利害を集約する階層性をもった都市が重要な役割をはたしたボトムアップ型の統治組織も発達し、多核多層社会が形成された。このような多核多層社会は近代ヨーロッパの特徴といえ、様々なネットワークの拡大・深化、これらのネットワークを介した財、人、貨幣、情報の集積、分散、経済、社会的な相互連関による構造変化、地域内分業の進展もまた近代ヨーロッパの発展と深く関わっている。これらのことから中世末期の低地地方はしばしば先駆的とされてきたが、それは同時にその時点では特異であったことを意味しており、中世末期の低地地方における市場経済化¹²⁾にあたっては、地域的・時代

3 商品市場・金融市場 取引所と非属人化

現代において商品市場、金融市場として一般的に想定されているのは、その場には売買の対象となる現物はなく、売り手買い手のもつ情報による売買が行われている（仮想空間を含む）取引の場所もしくはその取引自体であり、そこで決定された市場価格は全体（都市、地域、国、世界）の需給関係の指標として広く社会経済に影響をあたえている指標ともなっている。

中世ヨーロッパでは、中世初期の都市と都市をつなぐ巡回型取引をもとに次第に各地の都市や村を連鎖的に結ぶ陸路および水路の網目状の単層的な分散型ネットワークによる非日常財を基本とし仲介（商業・運送）を必要とする広域流通と、日常財を基本とし仲介業の余地が少ない域内流通との二元的な流通構造が形成され、広域流通の経路に沿った都市の一部で特定の一定時期に商人間取引・決済を行うために商人が集まる大市（日本における通称：fair）が開かれるに至った。離れた地点における購入時と売却時の差益を必要とする広域流通ではそれを担う商人の知識、技能などの属人的要素が大きな意味を持ち、大市はこれら商人による個々の取引が同じ場所と時間で行われている状態であったものが、中世末期より一部の大市開催都市において恒常的に取引を行う場所としての取引所（Exchange）が設立されたことにより、参加者が情報を共有し同じ条件での取引を行うことで経済学的な意味での需要と供給にもとづく適切な価格の決定が可能になり、これら商品・金融市場の成立、発展につながったと考えられてきた。

前節でふれたブルッヘの Byrsa Brugensis (Ter Beurse) では、イタリア商人による取引、決済が行われ、広場の周りのフィレンツェ、ジェノヴァ、ヴェネツィア商人の宿泊、取引に用いられた建物を所有した van de Beurze 家に由来するとされるその名称から転じた低地語 Beurs フランス語 Bourse ドイツ語 Börse は取引所を表す言葉となり、ロンドン Royal Exchange は the Burse と呼称されている¹⁴⁾。ただし、取引の状況としては個別の決済が行われていたと想定されることから、金融史においては、ブルッヘの Beurs がその後の金融を担う取引所の原型と位置付けられ、1531年に新たな建物をもとに運営されたアントウェルペンの Beurs が現代につながる最初の取引所とされてきた。

1531年に設立されたアントウェルペンの新取引所 Nieuwe Beurs は、それまでの商業的取引が行われていた取引所、市場を集約する形で新しい建物とともに設立されたが、その運営に関わる規則や制度も画期的なものであったと考えられてきた。取引所での取引は実施時間や取引方法を定めた規則のもとで行われ、その規則に従い取引の具体的な内容や価格が記録された。その後、これらの記録された価格などの情報をもとに新聞が発行されヨーロッパ各地に伝えられるようになり、アントウェルペンの取引所の価格はヨーロッパ各地の取引に影

響を与える指標性をもつにいたった。金融市場との関係で注目されたのは、手形への裏書きが認められたことにより特定の相手との決済の手段であった手形が譲渡可能な商品となったことで、このような決済手段の非属人化は金融市場の成立につながったと考えられてきた。もっとも、アントウェルペンの取引所のもつ近代性として特に注目されてきたのは、取引所では国籍と言語を問わないで同じ条件で取引できることが掲げられたことが端的に示す開放性と平等性であり、中世的な特権による取引の制約が強く、所属する都市、国により権利に大きな差があるフランドレンと、特権による取引に対する制約が少なく、所属による権利の差も少ないブラバントとの対照性が強調され、低地地方の国際的商業・金融中心がブルッヘからアントウェルペンへの遷移に関しても、ブルッヘと北海をつなぐ水系が土砂で埋まったという地理的な要因に加えてフランドルとブラバントの取引における自由度の違いがドイツ商人、イギリス商人の移動の要因ともされてきた。

ただし、近年の研究により、国際商業、金融の中心が都市の人口を倍増させながらその中心都市としての機能も拡大させながらブルッヘ、アントウェルペンへと遷移したこと、また、アントウェルペンの取引所の実態としては所属する集団により扱いに差異があることなどフランドレンとブラバントのもつ共通性や変化の連続性が明らかにされている。¹⁵⁾ また、毛織物業者と商人の取引を集約して行うために設置されたイーペル、ヘントの毛織物取引所、さらに穀物商人の活動と結びついたヘントの穀物市場についても、そこでの価格はその需要動向を示す指標性もっていたと考えられる。¹⁶⁾

以上のことから、1531年のアントウェルペンの取引所の成立をもって低地地方で現在につながる商品市場・金融市場が成立した。さらに、その成立は、これまでの低地地方諸都市や市場のもっていた機能を集約的に引き継いだとみることができる。ブルッヘが対外的な貿易の拠点ではあっても地域内流通の中心ではなかったこととは対照的にアントウェルペンは地域内流通においても中心的な役割もはたし、対外貿易に関しても、それまでのイタリア商人の南北ルート、ドイツハンザ商人の北海ルート、イングランドとのルートに加えて、ライン流域とならびに北中低地地方との商業ルートをもっていたことがアントウェルペン中心都市としての役割を大きく強化している。さらに、同時期のアムステルダムは、北海、バルト海地域とアントウェルペンをつなぐ上で重要な役割を果たしていた。

なお、金融史ではブルッヘの *Byrsa Brugensi* を出発点に北西ヨーロッパの金融中心はアントウェルペン、アムステルダム、ロンドンへと遷移したとされているが、近年の研究ではアムステルダムとロンドンの遷移には同時性があり、それぞれがアントウェルペンを核として形成されていた広域ネットワークの一部を、アムステルダムはそれに加えて低地地方内部の地域連関の一部分を引き継ぐ形になっており、資金の規模ともに地域の連関の中でそれぞれがどのような機能を分担したのかを研究することが重要になってきている。¹⁷⁾

4 おわりに 市場の発達と市場経済化 その多経路的变化

本論文では、中世後期からの市場経済化「取引の場としての市場が存在する経済」から「市場機能により調整される経済」に至る経路として、中世末期の低地地方に焦点をあて、現在につながる商品市場・金融市場の形成が1531年のアントウェルペンの取引所の設立を画期とすること、また、その設立は、属人的要素の強い商業取引の集約化の過程で生じ、アントウェルペンの取引所は、これまでの低地地方諸都市の市場や取引所がもっていた機能を集約的に引き継いだとみることができることを示した。第1節で述べたように、低地地方においては、資本主義の成立と深く関わる生産要素である土地、労働市場が形成されただけでなく、利益相反関係にある個別市場の統合としての地域市場の形成、労働価値から市場価値への変化につながる美術市場の形成がみられたと考えられている。さらに、それぞれの研究が対象としている「市場」には中世ヨーロッパ都市での取引の場に留まらない多様な要素を内包する「市場」から生産と消費が需給関係により調整されることを示す事象としての「市場」まで、市場として想定されている事象には大きな隔たりがある。

なお、労働市場、土地市場、地域市場（市場統合）の研究では、同期化、平準化を市場形成、統合の指標として各地の価格・賃金に対する価格分析が試みられているが、価格決定に関わる要因がどのようなものかが十分に検討されているとはいえない。さらに、経済学においては、外部からの干渉を受けないという意味での自由とともに、市場での価格決定の最適化に必要な要件として重視されてきた同一条件での参加、それを可能とする（公開性がもたらす）情報共有、公平性が存在したかについても十分に検討されているとはいいたいところがある。なお、市場統合としての地域統合の研究では、第1節でも述べたように、これまで「規制から自由へ」という考え方を基底として、流通の広域化に伴って現れた対象地域・財に関して特定の都市への流通・販売を強制するステープル権などの流通特権が、流通の自由を歪め、地域内都市間の利益相反の関係を中心都市に有利になる状況をもたらしたとされてきた。しかし、奥西（2013）ではヘントのステープル権が15世紀のフランデレンの状況のもとでは周辺の都市にも一定の利益をもたらす合理性があり、穀物供給および流通網の多元性と複層性、中心都市の強制性が、市場における価格調整機能を用いた社会の安定性につながることとの考えを示したが、流通の広域化が進む過程において個々の都市の制度、規則がどのように調整されたかなど十分に検討できない課題も残されていた。

地域市場、土地市場、労働市場に関するこれらの課題を解明するには、都市史、社会史、文化史との学際的な枠組みで、当時の低地地方の都市間、都市農村間には複層的な人的ネットワークがそれぞれの市場に関わる情報共有、公平性の存在にどのような影響を与えたかを研究することが重要となっている。

注

- 1) 英語としての語義の事例としては Capitalism: The possession of capital or wealth; a system in which private capital or wealth is used in the production or distribution of goods; the dominance of private owners of capital and of production for profit in Shorter Oxford English Dictionary, Sixth Edition, Oxford UP, 2007 (以下 SOED)
an economic and political system in which a country's trade and industry are controlled by private owners for profit, rather than by the state in Oxford English of Dictionary, Third Edition, Oxford UP, 2010, 2016 (以下 ODE)
Market Economy: an economy subject to and determined by free competition. (SOED)
an economic system in which production and prices are determined by unrestricted competition between privately owned businesses. (ODE)
An economy in which prices are determined by competition on the open market without government intervention in Chambers Dictionary, 13th Edition, Chambers Harrap Publishers. 2014
- 2) 中世ヨーロッパ市場の倫理については Davis, J. (2011), 市場の倫理の国際比較研究としては Middleton, S. & Shew, J. E. (eds) (2018) がある。
- 3) 英語としての語義の事例としては Market: A meeting or gathering together of people for the purchase and sale of provisions or livestock, publicly displayed, at a fixed time and place; the occasion or time of this. Also, a company of people so gathered. (SOED) がある。
- 4) 低地地方の都市の市場権の獲得過程については奥西 (2013) がある。
- 5) 計量経済学的手法により制度制約 (市場機能の阻害)・市場の失敗としての価格高騰, 市場の一体化による安定化を分析した研究としては Persson K. G. (1999), 近代における市場と国家のそれぞれの発展の相互関係を分析した研究としては Epstein, S.R. (2000), 穀物市場を対象に各時代の特徴に焦点をあてた研究としては Batman, V.N. (2012) がある。
- 6) Bavel, B. van (2016) は, 低地地方, イタリア, イラクとの国際比較などグローバルヒストリーの考えを取り入れた研究であるといえる。
- 7) 最も注目された研究としては Pomeranz, K. (2000) がある。
- 8) 南低地地方の統治に関わる官庁はブリュッセル, リール, メヘレンなどに分散して設置されていた。
- 9) 言語境界と商業の関係については Jeggle, C. (2014), 中世初期の低地地方の言語状況についての日本語の研究としては河崎靖, クレインス=フレデリック (2002) がある。
- 10) イタリア商人はブルッヘなど取引先のあるヨーロッパの諸都市に定住し現地の商人とイタリア人ネットワークをつなぐエージェントとしての役割をはたし, 人的信用に基づくイタリア商人間での取引では手形決済, 帳簿決済が行われたのに対して, ドイツ商人は基本的に現金による取引, 決済であったとされている。また, 売買時の通貨が異なるこれらの遠距離貿易の決済においては両替商が重要な役割を果たしている。Stabel, P. et al. (ed.) (2000)
- 11) Tilly, C. & Blockmans, W. (eds) (1994)
- 12) ブルゴーニュ公国期として低地地方を包括的に考察した代表的な研究として Blockmans, W. & Prevenier, W. (1999), Blondé, B. et al. (eds) (2018) がある。
- 13) Exchange: a system or market in which commercial transactions involving currency, shares, etc.

can be carried out within or between countries.

a building or institution used for the trading of a particular commodity or commodities A money market; an exchange ODE

- 14) Flume, J.M. (2021), Murray, J. M. (2005), なお低地語 Beurs の元となった後期ラテン語 Bursa (Byrsa) は財布, お金の供給の意味がある。
- 15) Blockmans, W. (2010), Gelderblom, O. (2013), Puttevils, J. (2020)
- 16) Espeel, S. (2019), 奥西 (2013) Howell, M & Boone, M. (1996)
- 17) 金融中心としての移行については Spufford, P. (2002), Flume, J.M. (2021) がある。

参 考 文 献

- Bavel, B. van & Hoppenbrouwers P. (ed.) (2004), *Landholding and Land Transfer in the North Sea Area (late Middle Ages – 19th Century)*, Turnhout.
- Bavel, B. van & Schofield, P. R. (ed.) (2008) *The Development of Leasehold in Northern Europe*, c. 1200–1600, Turnhout.
- Bavel, B. van (2010) *Manors and Markets: Economy and Society in the Low Countries, 500–1600*, Oxford.
- Bavel, B. van (2016) *The Invisible Hand? How Market Economies Have Emerged and Declined since AD 500*, Oxford.
- Bavel, B. van (2019) “Open Societies before Market Economies: Historical Analysis” in *Socio-Economic Review* 18–3, pp. 795–815.
- Bavel, B. van (2021) “Market Dominance and Endogenous Decline: the Contribution of Historical Analysis” in *Journal of Institutional Economics* 17, pp. 177–183.
- Batman, V.N. (2012) *Market and Growth in Early Modern Europe*, London.
- Blockmans, W. & Prevenier, W. (1999), *The Promised Lands: The Low Countries Under Burgundian Rule, 1369–1530*. Philadelphia: original Dutch edition published in 1997.
- Blockmans, W. (2010) *Metropolen aan de Noordzee: De Geschiedenis van Nederland 1100–1560*, Amsterdam.
- Blondé, B. et al. (eds) (2001) *Labour and Labour Markets between Town and Countryside (Middle Ages – 19th century)*, Turnhout.
- Blondé, B. et al (eds) (2006) *Buyers & Sellers: Retail Circuits and Practices in Medieval and Early Modern Europe*, Turnhout.
- Blondé, B. et al. (eds) (2018) *City and Society in the Low Countries, 1100–1600*, Cambridge: original Dutch edition published in 2016.
- Boone, M. (2002) “Urban Space and Political Conflict in Late Medieval Flanders”, in *Journal of Interdisciplinary History*, xxxii: 4 (Spring, 2002), pp. 621–640.
- Casson, M. & Lee, J (2001) “The Origin and Development of Markets: A Business History Perspective”, in *Business History Review* 85, pp. 9–37.
- Coase, R.H. (1988), *The Firm, The Market and the Law*. Chicago.
- Dijkman, J. (2011) *Shaping Medieval Markets: The Organization of Commodity Markets in Holland*, c.

- 1200-c. 1450, Leiden.
- Davis, J. (2011) *Medieval Market Morality: Life, Law and Ethics in the English Marketplace, 1200-1500*, Cambridge.
- Epstein, S.R. (2000) *Freedom and Growth: The Rise of States and Markets in Europe, 1300-1750*, London.
- Espeel, S. (2019) "The Grain Market and Preferential Trade of Large Landowners in Flemish Cities during the Age of Shocks (1330-1370)", in *MEFRM* 131/1, pp 29-44.
- Flume, J.M. (2021), "Constructing the Stock Exchange. On the Rise and Fall of an Iconic Place of Capitalism", in *Rechtsgeschichte – Legal History* 29, PP.412-430.
- Fontaine, L. (2016) *Le Marché. Histoire et Usages d'une Conquête Sociale*, Paris.
- Garicia, J. C. M eds (2019), *Markets and Exchanges in Pre-Modern and Traditional Societies*. Oxford.
- Gelderblom, O. (2013) *Cities of Commerce: the Institutional Foundations of International Trade in the Low Countries, 1250-1650*, Princeton.
- Hicks, J.R. (1969) *A Theory of Economic History*, Oxford.
- Howell, M & Boone, M. (1996) "Becoming Early Modern in the Late Medieval Low Countries", in *Urban History*, Vol. 23, No. 3, pp.300-324.
- Jeggle, C. (2014), "Interactions, Networks, Discourses and Market", in Caracausi, A. & Jeggle, C. (ed.) *Commercial Networks and European Cities, 1400-1600*, London.
- Lesger, C. (2006) *The Rise of the Amsterdam Market and Information Exchange: Merchants, Commercial Expansion and Change in the Spatial Economy of the Low Countries, ca. 1550-1630*, Aldershot.
- Middleton, S & Shew, J. E. eds (2018) *Market Ethics and Practices, c. 1300-1850*, London.
- Murray, J. M. (2005) *Bruges, Cradle of Capitalism, 1280-1390*, Cambridge.
- Persson, K.G. (1999) *Grain Markets in Europe, 1500-1900: Integration and Deregulation*, Cambridge.
- Persson, K.G. (2016), "9. Market and Coercion in Medieval Europe" in Neal L & Williamson eds., *The Cambridge History of Capitalism volume I*, pp.225-266.
- Pomeranz, K. (2000) *The Great Divergence, China, Europe, and the Making of the Modern World Economy*. Princeton Univ Pr.
- Polanyi, K. (2001, 1944) *The Great Transformation: The Political and Economic Origins of Our Time*, Boston.
- Puttevils, J. (2020) "Sixteenth-Century Antwerp, a Hyper-Market for All? The Case of Low Countries Merchants", in Blondee, B & Puttevils, J. ed. *Antwerp in the Renaissance (Studies in European Urban History 1100-1800)*, Turnhout, pp. 29-53.
- Spufford, P. (2002) "From Antwerp and Amsterdam to London: The Decline of Financial Centers in Europe", in *De Economist*, 154, pp. 143-175.
- Stabel, P. et al. (ed.) (2000), *International Trade in the Low Countries (14th-16th Centuries)*, Leuven.
- Stabel, P. et al. (2018) "Production, Market and Socio-economic Structure I c. 1100-c. 1320 & II c. 1320-c. 1500" in Brown, A. & Dumolyn, J. ed. *Medieval Bruges c. 850-1550*, Cambridge, pp. 86-123 & 196-267.
- Tilly, C. & Blockmans, W. (eds) (1994), *Cities and the Rise of States in Europe, A.D. 1000 to 1800*,

Boulder.

Unger, R.W. (1999) "Feeding Low Countries Towns: the Grain Trade in the Fifteenth Century", in *Revue belge de philologie et d'histoire*, 77-2, pp. 329-358.

Van Cruyningen, P. & Thoen, E. (ed.) (2012) *Food Supply, Demand and Trade: Aspects of the Economic Relationship between Town and Countryside (Middle Ages – 19th century)*, Turnhout.

Van der Wee, H. (1963) *The Growth of the Antwerp Market and the European Economy (fourteenth-sixteenth centuries)*, Den Haag.

White, H. C. (2002) *Markets from Networks: Socioeconomics Models of Production*, New Jersey.

奥西孝至 (2001) 「ヨーロッパにおける市場の発展と市場経済」, 『国民経済雑誌』183巻4号, pp. 89-103.

奥西孝至 (2004) 「中・近世ヨーロッパにおける地域間価格差と市場化」, 国民経済雑誌189巻1号, pp. 45-58.

奥西孝至 (2006) 「15世紀後半フランドレンにおける穀物価格上昇と地域の市場化」, 国民経済雑誌194巻2号, PP. 39-52.

奥西孝至 (2013) 『中世末期西ヨーロッパの市場と規制：15世紀フランドレンの穀物流通』, 勁草書房。

河原温 (2001) 『中世フランドルの都市と社会：慈善の社会史』, 中央大学出版部。

河崎靖, クレインス＝フレデリック (2002), 『低地諸国 (オランダ・ベルギー) の言語事情 -ラテンとゲルマンの間で-』, 大学書林。

丹下栄 (2002) 『中世初期の所領と市場』, 創文社。

森本芳樹 (2005) 『西欧中世形成期の農村と都市』, 岩波書店。

山田雅彦 (2001) 『中世フランドル都市の生成：在地社会と商品流通』, ミネルヴァ書房。